

松永久秀の健康法—死ぬ間際まで「だわったお灸、その真意とは？」

◆アクの強い男の最期

歴史上の人物というのは、その描かれ方によって全く印象が異なってきました。また、次々と新しい史料が発見されるにつれ、新事実が明らかになり、歴史が塗り替えられてしまうことも珍しくありません。結果的に、間違った人物像が定着してしまふ、そんなことも度々起こります。今回紹介する松永久秀がまさにそんな戦国武将のひとりといえるでしょう。

松永久秀といえば、「悪党」で「狡猾」な武将というイメージが強いです。最も有名なエピソードは「平蜘蛛の茶釜を抱えて自爆する」というもの。平蜘蛛というのは久秀所有の茶器の名前。その形が低い体勢で這いつくばっている蜘蛛に似ている、との由来があります。茶人としても名を馳せた久秀ですが、同じく茶器にこだわりを持つ織田信長から、この平蜘蛛の茶釜をたびたび切望されてきました。信長と決裂し、最期の時を迎える際に、自分の死後にこの茶釜が信長の手渡るのを嫌がり、茶釜に爆薬を仕掛けてそれを抱きかかえて爆死した、と伝えられます。もちろんこれは架

空の物語とはいえ、久秀らしい振舞いには違いないでしょう。

また、中国から輸入された性技指南書「黄素妙論」を愛読したともいわれます。男女の性交のノウハウを赤裸々に綴った指南書は、現代でも十分に通用する内容で、こういったことから、松永久秀といえば悪に染まった、気性激しいエロティックな武将の代表のようにいわれてきました。

◆急な事態に、灸をすえる

ところが実際は、天守を中心とした城郭建築の第一人者であり、茶人としての人となりを示し、三好長慶とその長男の義興に忠義を果たした果敢な武将であったのです。とりわけ、城づくりには定評があり、久秀が手掛けた多聞城は、ヨーロッパの城に似た高層建築であり、その美しさに宣教師も絶句したほどだったとか。久秀の美的センスは他の武将にはなかったものだったでしょう。

さて、信長に追い詰められ、自死を覚悟したとき、なんと久秀は「お灸」を自らに施しているのです。お灸は、当時の代表的な治療のひとつ。もぐさを体のツボに相当す

る箇所置き、線香で火をつけ、ツボを温めることで血行を良くし自己治癒力を高めようとする治療法です。その歴史は古く中国の伝統的医学を起源とし、日本でも長く親しまれてきました。

もともと久秀は中風（脳卒中のこと）予防のために日ごろからお灸を欠かしませんでした。しかし、これから死のうとする人間がお灸とは？ 不思議に思った部下が尋ねると、「いつも中風が心配でならないのだ。もし死の間際に発作を起こして体が動かなくなったら、きっと死が怖いのだろうと皆に笑われる。そんなことになれば、これまでの武勇は意味がなくなってしまう。お灸によって最後まで中風を防ぎ、快く自害したい」と述べたとのこと。

◆「悪党」と言われた男の裏の顔

この時代に予防の概念を持っていたこともさることながら、それを死ぬ直前まで実践していたことも驚きです。西洋医学では否定されがちなお灸ですが、自律神経を整えるには大変優れた力を発揮するのがお灸のような東洋医学です。

これまでの人生を振り返り、最期まで心穏やかにかつよく死んでいきたい、そんな久秀の願いは現代にも通じるものがあります。それを見事果たしたとは、何とも気骨にあふれた人物だったと改めて思いを強くするばかりです。



うえだ みつこ
植田美津恵

医学博士・医学ジャーナリスト。愛知医科大学医学部客員教授、東京通信大学准教授。日本未病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に「江戸健康学」「戦国武将の健康術」「忍者ダイエット」など。近著「いつか来る、はじめての“死”」も好評発売中。

